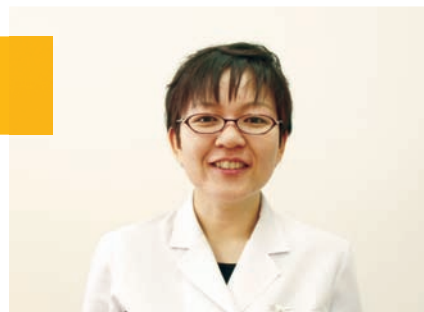


在宅薬剤師『やまね』の訪問日記

第11回

株式会社ファーマシイ 山根 暁子



年に1回会える、素敵な人がいる。在宅緩和ケアを教えてください。在宅医のお知り合いの音楽療法士の女性だ。

在宅ケアチームでは毎年、遺族会を開催する。遺族会はホスピス病棟では当たり前に行われている行事で、患者さんが亡くなったあとのご遺族とケアスタッフへのフォローをする、いわゆるグリーンケア（悲嘆のケア）だ。その会に必須なのが音楽療法士である。音楽療法士は、読んで字のごとく音楽で人を癒すセラピスト。彼女に会うまで、私はそうした仕事の存在も知らなかった。音楽によって感情が活性化される体験は誰も覚えがあるだろう（一説によると、人間の受容能力で最期まで残るのは聴覚なのだとか。終末期に意識レベルが低下した方の介護者にそう言って、患者さんに話しかけるように推奨する場合がある）。聴覚障害を持つ方でさえ、空気の振動を体感して音楽の力を楽しめるのだという。

*

私は、患者さんが亡くなってから1ヵ月半程度空けて患家を訪問し、自分なりのグリーンケアをしている。ときにご遺族はとても険しい表情で面会してください。まるで怒った顔にも見えるが、それはあふれそうな感情を我慢しているから。そうした場面で、かつて私は、彼らの感情の堰を切らないように気をつけていた。けれども遺族会を通じて、考えが変わった。

初めて参加した遺族会で、硬い表情で来場された方がいた。その方が辛い介護を経験されたと思い出し、それでも参加して下さったことに内心驚きな

がら、音楽療法士のフルートの演奏が流れる中、テーブルに案内しようとする——ご遺族は歩きながらほろほろと涙をこぼされていた。そして、「ああ音楽を聞いたら自然に涙が……」と少し恥ずかしそうに言って本当に美しい表情で笑われた。あの涙は浄化の涙で、流すことで次に進めるのだ。無理やりこじ開けるのではなく、草木の実がはぜるような涙をもたらす音楽の力を目の当たりにし、以来、泣いている人の傍でいづらさを感じる事が減った。気づまりな時間ではなく、感情の表出の場に同席を許してもらえる信頼関係をつくれているのかもしれない。そんな感覚で向き合えるようになった。

*

遺族会の空気を伝えるのは難しい。励ますだけでもない、悲しむだけでもない。無理に笑顔をつくる必要も、しみりする必要もない。これまでに3回経験したが、参加したことがない人に会の様子を明確に説明する言葉がいまだに出てこない。

唯一、雰囲気伝えるのに有効なのが「音楽」についてである。音楽療法士の女性のフルートに合わせてご遺族とともに歌う。声を張り上げる人はいない。皆が自分の心をのぞきながら、口ずさむ程度に歌詞を紡ぐ。ささやきが重なって遺族会の合唱になる。そよそよと聞こえてくる歌声は歌詞以上の何かを持って心に染みる。

歌声に寄り添うフルートを奏でる音楽療法士の女性と交わした言葉は、数えるほどしかない。しかし遺族会の音楽を通して深くお人柄を知っているような気がする。そして勝手に、とても崇拜している。